15　次の文章を読んで後の問いに答えよ。　　〈一橋大〉　二〇一四年度出題

幸福という言葉はいまはうろんな言葉だ。耳にしてそらぞらしく、口にしてためらわれる。あてにならない。歯ごたえある確かな言葉としてかんじられない。気のきいたやりかたで言葉をＡロウヒする。そうしたロウヒによってだいなしにされてしまった言葉だ。そのため手にうしなわれた言葉である。一幸福という言葉をつかってものをかんがえてゆく。思考のそうしたみちすじが、いまは容易にみいだしにくくなった。

　幸福という言葉は今日、確かにだめな言葉である。それは生き生きとしたどんなイメージもＢカンキしない。けれども、幸福という言葉をだめにしたことで、今日に何かがみうしなわれてしまったということも確かだろう。一つの言葉が手にうしなわれる。そのときみうしなわれるのは、ただ言葉だけではないからだ。その言葉によって生きられるような生きかたもまた、みうしなわれる。幸福という言葉をみうしなって今日にみうしなわれたのは、幸福という言葉でしかいいあらわせないようなア屈託をもった生きかた、だろう。

　幸福は「しあわせ」として読まれるのが、いまは普通である。「いまは幸せかい」「ぼくァ幸せだなあ」「幸せなら手をたたこう」というふうに、しあわせとして幸福は信じられてきた。しあわせであることが幸福なのだ。しあわせは仕合わせだろう。めぐりあわせ、運だ。運がむく。運がいい。しあわせは、しあわせかふしあわせかが、問題なのだ。「いいじゃないの幸せならば」だ。他人はかかわらない。しあわせとしての幸福は、個人の出来事だ。

　だが、そうだろうか。幸福はしあわせということだろうか。幸福をたやすくしあわせと読んでいる今日、うしなわれたのは幸福を「さいわい」と読む意識だ。しあわせ、さいわい。どちらの読みようが正しいかではない。何でもない読みようのちがいにみえて、しあわせととるか、さいわいととるかで、幸福のイメージのつかみかたは分かれる。はっきりちがってしまう。けれども、幸福がさいわいとして読まれることがなくなったいま、さいわいとしての幸福のイメージがどこかへみうしなわれてしまった。そのことをかんがえるのだ。

　幸田露伴に『文明の庫』（明治三十一年、一八九八年）という文章がある。子どものために書かれた文章なのだが、露伴の文章でもっとも好きな文章の一つだ。その緒言で、露伴は幸福について書いている。

　「人間のものは必ず人の手によりて造り出されたるものなり」「人間の幸福は必ず人によりて造られたるものなり」。

　人間には「ひとのよ」と、幸福には「さいはひ」とふりがながある。人間の幸福は「ひとのよのさいはひ」なのだ。何か特別なものなのではない。日常を日常として、Ｃフダンに明るくしているもの。それが「人の手によりて造り出されたる」さいわいとしての幸福だろう。

　「ひとのよのさいはひ」は、目立たずありふれてみえる。しかしそれは、よくみれば、でかがられたのようなものだ。「かの頭の中の考へより出で」「何人かの手の中の力より出て来りたる」さまざまの糸によってなくかがられた毬である。「一時一世にして」たちまちに成ったものでなく、それは「少しづつ少しづつ人の造り出したる幸福のまり積りて成れる」ものだ。

　人間の幸福はそのように、人びとの日々の仕様をつくりささえてきた工夫の歴史から成っている。人の世のありようのおよそ根本のところにあるのは、そうした幸福の経験だろう。幸福はありふれたものだ。ありふれたものだから、それはなくてはかなわぬものだ。

　二十世紀のイとばくちで書かれた『文明の庫』を読みかえすと、今日しあわせという言葉で了解される幸福のイメージが、露伴のたどった幸福のイメージといかに遠くかけちがってしまったことか、いまさらにかんがえさせられる。時代はとうに変わっている。異なる二つの幸福のイメージのあいだには、二十世紀のへてきた戦争と技術の時代の推移がおおきな溝をあけている。けれども、幸福についていえば、おおきくまわって変わってきた時代のＤナイジツは、さいわいという言葉をみうしなって、ただしあわせという言葉をのみ得てきただけだ。そうとしかいえないのではあるまいか。

　さいわいへの想像力。『文明の庫』の露伴はそれをかなめにおいて、歴史というものをみた人だ。日常のなかにあるあたりまえのものをゆっくりとみることをとおして、歴史を日常の歴史、さいわいの歴史としてとらえた。日常にあるあたりまえのものは、日常の用を足すものであると同時に、人びとが日常にあらわしてきたさいわいへの想像力の記録である。日常をよく生きるために人びとがはらってきた「なる心づかひ、鋭き智恵」の文明史が、さいわいの歴史なのだ。

　歴史を「俊傑」のいる風景として、戦史、権力史として語って、「古人の正しくてき精神の徳」をたたえる。歴史は一般にそのように語られやすい。「古昔の人の正大剛明の精神」をおもうことが、「今ここに我等の、を有し、綿ふらを身につけ、を口に上すを得る」ことについてかんがえるより、上等にみえるからだ。しかし、ちがうのだ。歴史の紙のうえに「俊傑」のＥフンボをかぞえていっても、人びとの生きた日常の歴史はみえない。さいわいへの想像力をじぶんにもつことができなければ、二誰にもみえていて誰もがみていないものを、はっきりみえるようにすることはできない。

　「戦史は争闘の史なり、文明史は幸福の史なり。戦史の上にはフンボの大なる人いたづらに多し、文明史の上には長く死せずして働く人多し、戦史の上には今も我等に影響を与へざる人多し、文明史の上には今の我等に徳沢をせる人多し」。

　露伴はきっぱりと書いている。

　「まことに文明史は愉快の書なり」「文明史の裏面は直にむべき道義の教訓なり」。

　『文明の庫』緒言は、同時代を先んじて生きたイギリスの思想家ウィリアム・モリスの『民衆の芸術』（一八七九年）をおもいださせる。モリスが「芸術」という言葉をおいたおなじ場所に、露伴は「幸福」という言葉をおいたのだ。幸福はartであってhappinessではない。

　幸福という言葉はいまは「しあわせ」になった。人間もまた「にんげん」になり、その言葉から「じんかん」「ひとのよ」のイメージはみうしなわれた。『文明の庫』の時代からは遠く、環境が変わり生活の様式がうつった時代に、しあわせという言葉は、いわゆる大衆社会が採用したほとんどただ一つのイデオロギーの言葉になった。そして信じにくくうろんな言葉になった。たやすく消費される言葉ではあっても、だめな言葉でしかなくなっているしあわせとしての幸福という言葉は、今日という時代を、一語でみごとに語っている。三さいわいなしのしあわせ時代。二十世紀の子どもたちへのおくりものとして書かれ、いまはわすれられている露伴の言葉がおしえてくれたことだ。

―─長田　弘「幸福という一語」

（注）　ふらねる　柔らかい起毛織物。フランネル。

問１　傍線Ａ・Ｂ・……Ｅを漢字で書け。

問２　傍線ア「屈託」・傍線イ「とばくち」の意味を簡潔に答えよ。

問３　傍線一「幸福という言葉をつかってものをかんがえてゆく。思考のそうしたみちすじが、いまは容易にみいだしにくくなった。」とはどういうことか、簡潔に答えよ（四〇字以内）。

問４　傍線二「誰にもみえていて誰もがみていないもの」とはどういうことか。簡潔に答えよ（五〇字以内）。

◎問５　傍線三「さいわいなしのしあわせ時代。」とはどういうことか、簡潔に答えよ（五〇字以内）。

【解答と採点基準】

問１　Ａ＝浪費　　Ｂ＝喚起　　Ｃ＝不断　　Ｄ＝内実　　Ｅ＝墳墓

問２　ア＝何かに対するこだわり　　イ＝ごく初期の段階

問３　幸福という言葉はＡその背後にある人の生きかたを考えるにはＢもはや軽すぎるということ。（４０字）

Ａ・Ｂがなければ全体０。

Ａ＝５〔「生きかた」という意味内容がなければ不可。〕

Ｂ＝５〔「もはや」（「今では」などでも可）という意味内容がなければ減点２。「軽すぎる」は他の否定的表現でも可。しかし、それがなければＢ全体が不可。〕

問４　Ａありふれているために、Ｂ誰もがその価値に気づけないままＣ積み上げられてきた、ぬくもりのある日常生活。（４８字）

Ａ・Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝３〔「誰にもみえていて」という内容を説明していれば可。〕

Ｂ＝３〔「誰もがみていない」という内容を説明していれば可。〕

Ｃ＝４〔「人びとの生きた日常の歴史」という言葉、またはそれをわかりやすく説明した意味内容であれば可。〕

問５　Ａ日常をよく生きるための人々の細やかな心遣いや鋭い智恵に無関心で　Ｂ個人の運のいい出来事を幸福とする時代。（５０字）

Ａ・Ｂがなければ全体０。

Ａ＝５〔「日常」という言葉がなければ不可。〕

Ｂ＝５〔「個人」という言葉がなければ不可。「運」という言葉がなければ減点２。〕